

弔辭

著者	諸橋 轍次
雑誌名	漢文學會々報
巻	7
ページ	8-8
発行年	1938-03-17
URL	http://doi.org/10.15068/00146840

弔 辭

穆堂島田先生忽焉として薨去せらる。斯界また一老を喪ふ、哀悼に堪ふ可けんや。思ふに慶明の際、泰西技術の學盛行し斯文一脈絶えざること縷の如し。先大人篁村博士此の間に出で識見明達、學今古を兼ね、經史百家淹貫該通能く文運を既倒に回す。洵に近代儒林の偉觀たり。先生幼にして聰慧、夙に先業を承け、淬勵切劘、深く藏し中に蘊む、經義宋儒を主とし、考據清學に依る。昭和四年東京文理科大学の創始せらるるや、聘せられて漢文學科を擔當し提撕訓迪前後七年、其の諸生を導くや懇切丁寧循々序有り、是を以て從游の者皆講席に侍するを以て樂みと爲せり。且先生醇厚の資淵默樸素作爲なく將迎なくして而かも不言の感化は蘭室の薰の如し。我が漢文學研究室が學界の後進を以てして尙堅實の學風を保持し、諸友歡娛の間麗澤講習器に隨ひ材を成すもの皆先生の賜なり。然かも後進の先生に期する所今後益々多からんとするの時、一朝溘焉として道山に歸せらる。幽明杳然溫容長へに接す可らず。空しく遺影を仰いで往日の提誨を追思するのみ。茲に永訣に臨み、謹みて舊誼の深厚を拜謝し、恭しく景仰の誠を捧ぐ。

昭和十二年十二月十六日

東京文理科大學漢文學研究室

諸 橋 轍 次